

木のお医者さん

大恵 やすよ 兵庫県西宮市 三十五歳

幼いころ家の近くの街路樹に電飾がつけられ、キラキラ光りとてもきれいでした。白く輝く光に私の胸はドキドキが止まりませんでした。しかしそんな私とは逆に父は悲しそうな表情でした。クリスマスが近づいた日、私は家の庭の木にも電飾を付けたいと父にお願いしました。するといつも穏やかな父の表情が一変しました。「電気を巻きたければ人間に巻けばいい」父が言いました。「やっちゃんは電気を巻かれたらうれしいか？飾りをつけることはお洒落をしているのと一緒にいいかもしれない。でも電球をつけられて、木は熱くないのかな？木は生きている。人がされて嫌だと思うことは植物にもしてはいけない」父はそれ以上何も言いませんでした。父は日ごろあまり自分の考えや気持ちを口に出すことがなかったので、今でもこの時の言葉は私の胸に刻まれています。

父は造園業を営んでいました。幼いころ父の仕事は木のお医者さんだと姉から教えられていました。父は六十歳を過ぎ仕事を辞め、今は私の家の庭の手入れをしてくれます。そして庭の植物と何か話をしています。やっぱり仕事をしている父の姿はカッコイイです。

父は朝起きると一番に植物に水やりをします。「人間の喉が乾くんだから木も喉が渴いてるだろ」と言って、自分が水を飲むより先に庭に出ます。きっと父には植物の声が聞こえているんだと思います。だって父は木のお医者さんだから、今でもそう信じています。